
Cherry of Night

西沢恩

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Cherry of Night

【コード】

N1533E

【作者名】

西沢恩

【あらすじ】

高校の演奏会を終えた私は例のごとくOBの飲み会に誘われ、参加した。これは、そんな私が見た、酒に溶けた、男たちのほろ苦い物語。

Cherry of Night

第1話

「ちいっす！」

現役高校生の吹奏楽部員はもちろん、3つ、4つ下の後輩達まで。定期演奏会に来た高校時代の恩師、小山俊太郎先生の構える一眼レフカメラの前ではしゃいだような、満面の笑顔でVサイン。母校である地元の高校の定期演奏会に顔を出すようになって、これが2回目の演奏会だった。四月に入って最初の土曜日の夜、満開のソメイヨシノが街灯にライトアップされ、普段と違う景色を演出していた。観客席にいるときはまだうすら寒かったのに、いざステージに立つと、スポットライトも功を奏してか、いつの間にか汗が噴出し、衣装のブラウスが汚れていた。

今回演奏したのはフアリアの『三角帽子』終演の踊り』など、吹奏楽の大曲が多く、演奏するだけでも相当なエネルギーを要するラインナップ。吹ききった瞬間はひとつ走りした後のように息が上がっていた。

観客からは割れんばかりの拍手が起こっていた。例年より観客はやや少なめだったが、納得できる演奏ができ、私としては満足だった。

私の一つ下の後輩達も何人が参加していて、トランペットの後輩達が再会に花を咲かせていた。当時部長だった後輩の栗生尚史君も来ていて、再会に私も花を咲かせた。私は何かとよくしてくれた一つ上の先輩とも久しぶりに会った。後は恩師の先生くらいかな？成り行きで受付嬢を務め、健在振りをそれとなくアピールした。

「平成19年度はこちらですよ。」

と、今年で定年退職し、私の高校時代も世話になった体育科の中里紀代子先生に名簿を示した。妙に高いテンションで。

今回長年顧問を務めた元担任の筒村綾乃先生が転勤となるため、実質これが彼女の前で披露できる最後の演奏会だった。現役の部員に頼まれて書くことになった色紙を目の前にすると、5年前の青春の日々が鮮明に蘇る。

みんなはもう社会に出て2年目、あるいは新社会人だろう。私は大学院生として地道に今通っている大学の教員を目指している。日本と言う枠の中でやろうと思ったらそりゃいろいろ上手く行かないから、イギリスなど海外の研究機関と連携をとっていくことも計画している。こんな夢を描けるようになってつくづく、英語をやっておいてよかった。と、思った。大学の教員になったら、自主ゼミなどの形で何か将来の学生さんと一緒に研究プロジェクトをやりたい。そんな夢など、あの頃には見ることもなかった。そんな、暗く、ほろろしい、ごく普通だった私の青春。

「瞳美ちゃん、お疲れ！」

クラリネット片手に帰っていくOGで私が現役1年の時の部長だった富山文音先輩。明るい笑顔は今も変わっていない。

私もあの頃のままではいられているだろうか。そう聞かれると、やっぱりそうはいかない。あの頃と今とは立場も違うし、あれからいろいろな経験も重ね、それらのひとつひとつが走馬灯のように蘇る。泣いて、笑って、悩んで、ありふれながらも貴重なドラマだったが、鬱病のような状態になりかけたこともあった。一歩間違えればどんだん闇の中に引き込まれていきそうなあの地獄のような感覚、演奏会に顔を出すようになったのは、そんな心境を超えてからのことだった。

慣れ親しんだホールを後にしようと、階段に足を下ろした途端、

「おう、帰るのか？」

と、木藤先輩が声をかけてきた。木藤悟先輩。私の倍以上の年齢を重ねた、ジャズトランペット奏者。定期演奏会に顔を出しては豪快なハイトーンを披露し、現役高校生の度肝を抜いていく。後輩も

またジャズトランペット奏者を目指しているらしく、その影響力は計り知れない。いわばわが高校吹奏楽部伝統屈指のドンだ。そんな先輩の一言に、足を滑らせそうになりながらも、

「いえ、どうしようかなって。」

と、答えてみた。

「そうか！じゃあ行こうぜ、あれ！」

「あれってまさか…。」

「そうそれ！瞳美ちゃんいないと盛り上がらないぜ！」

と、豪快に私の肩を叩きながら笑う。いつになっても変わらないな。私は小さく苦笑した。前は同期の戸村祐一君と後輩の白石順一君と6人、居酒屋で飲んだな。今回はどうやらその2人が抜けて私を含めた4人だけらしい。

若手は私だけかよ…。

心の中で小さくぼやいた。

第2話

通っていた高校の定期演奏会を終え、20歳以上も年の離れた先輩に例のごとく打ち上げに誘われた。高校を卒業して早5年目の春、10時も回り、更けこんだ夜の居酒屋は昼間のような活気に包まれていた。

「いらっしやいませ。お客様、申し訳ございません。できるだけ早く席を案内しますので、少々お待ちください。」と、男性店員が済まなさそうに言った。

がやがやと膨れ上がった居酒屋は若い女の子から年を召した人まで幅広い年代の人でにぎわっていた。50前後の男性3人に若さほやほやの私はどう考えたってミスマッチだった。

私はどうい理由か、この年頃の女性にしては珍しく、野球と流^は行^{やり}とは無縁の音楽とか、色気のない話を延々と繰り返す傾向にはある。ようやく覚えた化粧だって薄めで、自己流。それだけにキャンバスに溢れる花盛りの若い女子学生を見ていると、時々惨めになる。「お待たせしました。こちらへどうぞ。」通されたのは2階の座敷だった。明るい暖色系の明かりが照らす店内は柔らかい明るさで、くつろいだ雰囲気演出している。座敷ともなれば尚更だった。

「何にする？遠慮することはないぞ。」と、飲む気満々の木藤先輩を前に私は苦笑しながらサワーと軟骨の唐揚げを頼んだ。

「嫁にな、言われたんだよ。ほどほどにしろよ。って。」

「あ、オレもオレも。」

豪快に笑う先輩達。私も30年後にはこうなっているのだろうか。

「おつかれ〜！」

ビールとサワーで乾杯した。運ばれてくる料理に、先輩達は何杯もビールを飲み干していた。私はジョッキの果物系サワーを2杯飲んだだけで、その飲みっぷりは豪快だった。

「レモンかけていい？」

「え、ええ。」

「これだけで嫁と一時間くらいケンカするんだよ！」と、メガネの船橋博先輩が零した。私はサワーを一口、口に含みながらはあ、とばかりに聞いていた。何を話せばいいのやら、話題を探しながら浮かんだのが、高校野球。先日までテレビの前で大騒ぎしながら見ていた。京都からも1校、古豪と言われる常連校が久しぶりに出場したので、それなりに熱心に応援していたが、結果はいつものベスト8だった。かつて私の母校が甲子園に出たことがあるのは知っていたが、もう30年以上前の話だ。今の野球部はまた甲子園を目指して練習しているというけど、今度私達の高校が甲子園に行けるのはいつになるだろう。

「あの、前に、うちの高校が甲子園に出たことがあるって聞きましたけど…。」

「ああ、それ！船ちゃんの頃。あの頃はすごかったで〜！」

「そうなんですか。」

「父兄や生徒、地域の人らバス60台くらいで甲子園に行ったよ。甲子園で吹きすぎて、コンクールでも音がべるんべるんで、全くダメだった。」

「そうなんですか。今度またうちの高校が甲子園に行ったらまた大応援団になりそうですね。」

「なるだろうな。」

この春見ていた選抜高校野球、甲子園は応援団で溢れかえっていた。2000人、3000人なんて当たり前、すごいところでは5000人とか、6500人とか、想像もできないような規模で、応援にやってくるのだから、強豪と言われる学校だってやりにくいだろう。やっぱり、というか、案の定強豪と言われた駒沢旭川、横浜学園、常葉学院などの注目された優勝候補は早々に甲子園を去った。3年ほど前から大阪で博物館のボランティアをしていた縁で知り合った高校野球ファンのおじさんと一緒に観戦に行った地元京都外

大附属の試合。たった2回で7点差をひっくり返す大逆転劇で、地元ファンが集まる甲子園全体が沸きかえった。それがきっかけでちよくちよく高校野球を見ていたが、翌年はスター選手の豪華対決、さらにその翌年はなんとなく応援していた九州勢が大躍進と目が離せない要素が盛りだくさんだった。今年の春は地元近畿が初戦無傷と大躍進で期待したのだが、終わってみればベスト8、ベスト4と、いつもの成績だった。

私の印象ではここ最近九州・沖縄勢が強い。応援団だって半端じゃないし、地元の盛り上がりもすごい。実際去年の夏の決勝戦、生で観戦したから、コンサート顔負けの、あの熱気は肌にしっかり記憶されている。

「見に行ったのか！」

「ええ、すごかったですよ。もうみんなで声の限りを尽くす大声援でした。それが甲子園の観客をも巻き込んでね…。あの光景は当分忘れられそうにないですね。」

酒に酔ったのか、私は幾分声を張り上げた。

「知らないのか？九州・沖縄って言ったらかなりの野球大国だよ。」

「え、そうなんですか！？」

「あつちはかなり熱心だからね。」

「そうなんだ。九州・沖縄ってそんなに野球好きな人が多かったんだ…。」

今回のセンバツは沖縄の高校が優勝したのだが、アルプスいっばいの応援団に沖縄民謡を踊りながらの大応援。相手もこれはやりにくい。しかも不調であることを突くかのような猛攻で、見ていて気持ちがいいものだった。

「なんつうか、あつちの男は飲むのが好きなんだよ。それもこうみんなでわいわいとね。福岡はソフトバンクがあるけど、佐賀とかにはない。だから高校野球が熱くなるんだよ。優勝したらもうすごい。居酒屋がどこもパンクする。」

「はあ〜。」

「かなり野球好きに染まったね〜！」

「そうですか。まだ3年ほどですけど、よく見るんですか？」

「練習の合間にな。そもそも野球って言うのはリズムがあつてな、音楽とよく似てるんだよ。投げる時、こつやつて足上げて、それから1、2、3で肩を振り下ろす。」

木藤先輩はタバコをふかした。紫煙が暖色系の明かりにかすんでいく。

「はあ…。」

さつきからこればかり。悪いが私はまだ23の小娘だ。話を聞いているだけで頭の上がない思いでいっぱいになる。野球が好きだといつても、カーブ、ストレート、スライダー、カットボール、チェンジアップ、ツーシーム、フォークなど、名前はわかつてても何のボールか見ただけではわからない。フィギュアスケートのジャンプも同じ。アクセル、ルッツ、ループ、トゥループ、サルコウ、フリップと名前はわかるが、見ただけでは何のジャンプかいまだにわからない。

「いいねえ、瞳美ちゃんは！すっかりオヤジになったよな〜！」

「や、やめてくださいよ。」

「いやいや、悪いことじゃないんだよ。」

私は返事に困ってしまった。

「しかしなあ、俺たちや、貧乏だからなあ。俺、いまだに小遣い生活だし。」

「ははは、俺もだよ！」

豪快に酒を交わしながら笑いあう3人に私は一種のノスタルジー、いや、センチメンタル、なんといえはいいのだろうか。妙にしんみりした気持ちになる。50年近く生きてきた人生をこうして酒と共に飲み、交わす。そこだけ空気がセピア色に染まっていく。

一口すすったサワーはほろ苦かった。レモンの味の後にアルコールが口に広がる。

第3話

酒宴も佳境に差し掛かってきた。酒のせいなのか、視界が少しぼんやりとかすんだ。先輩達は一体何杯飲んだか、私にはもはや皆目見当もつかない。限界まで膨らんだ胃袋に鞭を打つように私は料理を口に運び、合いの手を入れるように笑っていた。

音楽の話、後輩の腕前、さらには高校野球の話。あのピッチャーが良かった。常葉学院が負けるとはびっくりとか、もう少し打った方が盛り上がったのに。など、サワーを含みながら語る口は気づかぬうちに艶と熱を帯びていった。ひとしきり喋りきって力が抜け、私はサワーをグツと飲み干した。

「それにしても瞳美ちゃんはやっぱりいいおっさんの味が出るよなあ、若いのに。」

「そうですか。」

「ああ、今の喋り口なんか立派におっさんだぜ。それに、普段から物怖じしないしな。こんなむさいおっさんが3人もそろってペット鳴らしていたら、普通は声かけられないぜ。それを簡単に乗り越えてきたもんなあ。」

あまり冒険したと言つ意識はないのだが、実際にはそれだけのことをしていたと言つことに少なからず私は驚いた。

「なんたって、瞳美ちゃんは賢いもんなあ。他の子とは違った賢さがあるしな。」

それは自覚していた。最近自信をつけてきたことの一つだった。ただ、学校の成績に現れる賢さとは違うので、はっきりとはわかりにくいし、説明も難しい。普通の人よりいろんなことをよく覚えていたりはすると、家族にもよく言われるから、記憶力には少し自信がある。勝手がわかれば自己流にいろいろ自由にアレンジできる。パツとわかるものとそうでないものとある。音楽もまた後者だった。それでも、そのことに気づいてくれる人はなかなかなくて、ちょ

っと嬉しくなった。

ただ、私だつてやつぱり女性だ。周辺の女の子のように小奇麗にしていたほうがいいのか、と思った日も指では数えられないほどあった。口紅や目移りしそうなほどきれいな服に心奪われた日だつてないわけではない。ただ、自分には似合わないと思つていた。自分の似合う服がなかなかわからなくて、地味にしていただけだった。だから、自分に自信が少しだけでもてるようになったからといって、常に自信を持っていられるわけでは決してない。

「本当は、もう少し女の子らしくいたほうがいいのかもしいけないけど...。」

私はちよつとうつむいた。

「いいつて、いいつて。別にほかのこと一緒にならなきゃならない理由なんてないからさ。もっと自信もつていいと思うよ。話変わるけど、眉の辺りとかもつと上達すれば、もつといい女になるよ。やつぱり年に一回はこういうおっさんの話を聞かないとな。」

さすが、50年生きてきた男性の意見はいつだつて新鮮だ。こういう若さが私にとって、彼らの魅力であり、現役の高校生達が常に憧れ続けられる秘訣のように感じた。豪快な笑い声に辺りがぼんやりと、しかし明るくかすんだ。飲み交わす酒はほろ苦く、笑い交わす先輩達にちよつとだけ、いつもと違う、深みのある味を酒に覚え

た。

空になった皿とジョッキが並ぶテーブル。打ち上げもそろそろお開きになり、夜、外に出た。腕時計に目を向ければ既に夜中の0時20分。こんな真夜中まで外をうろついたことは初めてだった。そうだと言うのに、車はまだ数台ごとに走り抜けていた。

「じゃあな、お疲れ！」

「また定演出るよ！」

私は手を振りながら先輩達と別れた。真夜中の空気はひんやりと冷たいが、春らしくふんわりと柔らかい。営業を終えた駅の切符売

り場にはシャッターが下ろされ、電車の電光案内板も消えていた。昼間とはひときわ雰囲気の違う、真夜中の街。

酒に酔った心地よさに酔いながら、私は駅前でタクシーを拾った。1人で乗るのは高いので、あまり乗りたくはなかったのだが、今は真夜中その上若い女1人。さすがにこの状態で無防備に街を歩く勇氣はなかった。その上電車も今はない。ただでさえ静かな住宅街は一際静まり返っていた。

タクシーは速い速度で人気の失せた街の中をすり抜けていく。真夜中だと言うのに、頭は不思議と冴えていた。

年に一回はこういうオッサンの話を聞かないとな。

不意に木藤先輩の言葉が脳裏をよぎる。私は真夜中の街中に咲く夜桜をタクシーの窓から眺めた。ライトに照らされた桜色が足早に目の前を通り過ぎていった。

第4話

桜も終わり、若葉が芽吹いた日曜日の昼、私は近くのイタリアンレストランのテーブルに座って、ハードボイルドミステリーを読んでいた。この4日ほど連続で一日バイトで働きづめだったので、ちよつと羽を伸ばしたかった。

「なすとほうれん草のミートソーススパゲッティとかぼちゃのタルトですね。はい、少々お待ちください。」

本を読むにはこういうレストランの席が一番良い。ここは料理はもちろん、ドルチェのかぼちゃタルトがたいへん美味だ。

広げた本の中はおどろおどろしく、一癖も、二癖もありそうな人物が劇中で暗躍している。本の中と日曜の午後の、活気溢れるイタリアンレストランとの違いに思わず苦笑した。通常の小説文庫本の何倍もある小説を書くことで知られる作家だけあって、序章だけで普通の文庫本1冊に相当してしまう。就職活動の面接で、こんな本を読んでいると見せたら、人事がひっくり返るほどだった。この作家はこれが普通の量で、なんら驚くことはなかったのだが。いよいよいつもの面々が登場し、また奇怪な事件に巻き込まれていく。物語が加速し始め、ページをめくる手を止められない。夢中になってひとしきりページをめくり続けると、いつの間にか20ページくらい一気に読んでいた。一呼吸置くと、

「お待ちせしました。なすとほうれん草のミートソーススパゲッティです。」と、バイトと思われる若い女性が頼んだパスタを出していた。辺りを見渡せば、他の客の会話がうるさいほどに耳をつんざく。たわいのない会話で、日曜のレストランはものすごい賑わいを見せていた。

料理の味は美味しかった。濃厚なミートソースと野菜の味がパスタによく絡んでいる。

たまの贅沢に、と入ったレストランだったが、まあ満足といった

ところだろう。

ふと、打ち上げでの会話が蘇る。

「50になった今だって小遣い生活なんだぜ？」

「年に一回はこういうおっさんの話を聞かないとな。」

貧乏だと言われていても、野球に熱狂したり、ジャズなどの音楽や趣味に興じるなど、それなりに人生を謳歌している。

1万稼ぐために何時間も会社や組織に従事するよりも、1時間思い切り楽しんでみるほうが、ずっと気楽で、何倍も、何十倍も充実感がある。どこかのマスコミが垂れ流す腐った情報より、居酒屋で50年生きてきたおっさんの話のほうがずっと価値のある情報だったりするのだ。従兄や高校時代の友達から電話の向こうから流されるのは愚痴が多く、私にとっても就職は高いだけのハードル。頑張るだけで擦り切れて人生終わるなんて願い下げだ。どうせなら、自分のやりたいと思うことを納得できるまでやりきった人生にしたい。そう、先輩達かれらのように。

さて、次は何を読もうかな？

私は再び、分厚い文庫本を手にした。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533e/>

Cherry of Night

2008年11月7日07時02分発行